はじめてのオンラインＲＰＧ

ワンダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はじめてのオンラインＲＰＧ

【Ｎコード】
Ｎ９０９６Ｘ

【作者名】
ワンダ

【あらすじ】
姉に頼まれＭＭＯＲＰＧをプレイする事になったオンラインゲーム初心者の主人公・アキラ。
アキラは姉からの頼みを果たす事ができるのだろうか？

第一話【はじまりのはじまり】

「アキラ、お願い！　三日間だけでいいから！」

ゴールデンウィーク、初日の朝。
自分の部屋でのんびりしていた僕は、ノックせずにいきなり入ってきて、何の説明も無しに「三日間だけ」なんてのたまっている姉に対応できずにいた。

「ねえ、お願いってば！」
「姉さん、落ち着いて。三日間だとかお願いとか、いったい何の事なのか説明してよ」

見るからに慌てていた姉さんだったが、僕の言葉で落ち着きを取り戻したらしく「そうね、そうだったわ……」と呟き、大きく深呼吸をした。
その後、姉さんから説明を聞いて自分なりに頭の中で情報を整理してみた。
姉さんはつい一時間ほど前、予約していたゲーム機と同時発売のゲームソフトを買った。
ゲームソフト自体はこのご時世じゃ珍しくもないオンラインＲＰＧだ。
しかし、ゲーム機は違う。姉さんの買ったゲーム機『ダイバー』はゲーム内の世界、仮想現実空間にいるプレイヤーのアバターに意識が入り込む。
プレイヤーの意識が入り込み、アバターと一体化したプレイヤーはアバターの体を文字通り自由に動かせる。
そして、アバターと一体となったプレイヤーの視界には、ゲーム内

の景色がリアルさを伴って目前へと映し出される。
つまり『ダイバー』を使うと、まるで本当にゲームの世界にいるような気分になれるということだ。
その『ダイバー』とソフトを買ってきた姉さんはすぐさまゲームを始め、とりあえず自分の分身となるキャラであるアバターを作成し、本腰を入れてプレイしようとしたところで部活の合宿がある事を思い出したらしい。
ゲームはやりたい。でも合宿をサボる事はできない。
『ダイバー』を持って行こうとも考えたが、合宿中はゲームなんてやってる暇は無い。それに万が一『ダイバー』の持ち込みがバレようものなら、没収は確実だ。
しかし、三日間は長い。発売日に買ったとはいえ、スタートから出遅れたらあらゆる面で不利だ。
姉さんは大層苦悩したらしいが、脳裏にある一つの考えが浮かんだ。
その考えとは、姉さんの代わりに僕が代理でゲームをプレイするというものだった。
それで、そのお願いをしに僕の部屋に来たらしい。

「まあ、事情はだいたいわかった」
「じゃあやってくれるの？」
「それとこれとは話は別」

僕にそんな面倒そうな事を引き受ける義理は無い。
それにオンラインゲーム自体、一度もプレイしたことが無い。
興味はあるが、他人のキャラを使うのは気が引ける。

「そんな冷たい事言わないでよー」
「帰ってきてから存分に遊べばいいじゃん」
「だから、それじゃ困るから……よし、なら引き受けてくれたらバイト代出すわよ」

金で釣りに来たか。
姉さんも必死だな。

「いくら？」
「千円でどうよ」
「条件は？」
「レベルを十以上上げる事。あ、もっとレベル上げたらバイト代追加してあげる」
「うーん……」

三日でレベルを十以上上げる、か。
姉さんの話を聞く限りではまだレベル一のままだろうし、多分すぐに達成できるだろう。
その事を踏まえた上で千円という話はなかなか良い条件だ。

「よし、そのバイト受けるよ！」
「やった！　じゃ、ソフトと本体持ってくるから！」

そう言うと、姉さんは一旦自分の部屋に戻り、すぐに僕の部屋に戻ってきた。
片手にはＣＤケースのような物を。
もう片方の手にはバイクに乗る人が被るヘルメットのような物を持っていた。

「これが本体の『ダイバー』ね」

ヘルメットのような物を軽く掲げてみせ、僕のベッドの上に放り投げる。
おいおい、新品なのにそんなに雑に扱っていいのか？

「んで、これがソフトケース」

CDケースのような物のフタを開けると、中には何も入っていなかった。

「ソフトはもう『ダイバー』の中に入ってるから」

じゃあ何で空のソフトケースを持ってきたんだか。

「この中には説明書が入ってるから、ゲーム始める前に読んどきなさいよ」

なるほど、そのために持ってきたのか。

「さて、それじゃコレの起動の仕方を教えるわ」

さっきベッドに放り投げたばかりの『ダイバー』を拾い上げ、僕の方に近寄ってくる。

「まずはコンセントにコレを挿すの」

姉さんは『ダイバー』の頭頂部からはみ出ていたプラグを掴み、電線もろとも引きずり出しコンセントにプラグを挿した。

「挿したら、コレを被って右耳の辺りにあるスイッチを押せばゲームが始まるから。ここまで解った？」

「うん、覚えた」

むしろ、これしかない手順を忘れる方が難しい。

「よし、これで準備はＯＫね」

姉さんは一仕事終えたかのような達成感に満ちた表情をしていたが、すぐに我に返り時計に視線を移した。

「さて、そろそろ学校に行かないと」

姉さんは再び部屋に戻ってボストンバッグを持ち、僕の部屋の前を通過した。

「行ってらっしゃーい」

「あいよー。お父さーん、行ってきまーす！」

「おう、行ってらっしゃい」

少しして玄関のドアの閉じる音が聞こえた。

「行ったか……さてと」

すぐにでもバイトを始めたいところだが、先にソフトケース内に入っている説明書に目を通す。

それから二十分ほどかけて説明書を読破。

「よし、後は出たとこ勝負だ」

『ダイバー』を手に取り、ベッドに横たわる。

安全上の理由から、立った状態だったり、座った状態での使用は禁止しているようだ。

『ダイバー』を装着し、手探りでスイッチを探す。

「えっと、右耳の位置にスイッチが……あった」

探し当て、スイッチオン。
目の前のモニターに『ダイバー』製作会社の名前とロゴが表示される。
続けて『ダイバー』に入っているソフトの製作会社の名前とロゴが映し出された。
その画面のまま数秒が経ち、名前とロゴが消える。
次の瞬間、目前にメッセージウィンドウが開かれた。
メッセージウィンドウには【前回、中断した地点から開始します】と書かれてあった。
そのメッセージウィンドウが閉じた瞬間、眩しい光がモニターに映し出された。

「うっ、まぶしっ！」

あまりの眩しさに、反射的に目を閉じる。
目を閉じてもなお眩い光だったが、次第に光量が落ちてゆくのが今の状態でもはっきりと解った。

「そろそろ大丈夫かな……」

もう眩さは微塵も感じない。
恐る恐る目を開いた僕の視界には、自分の部屋の天井ではなく、晴れ渡り澄み切った青空とレンガ造りっぽい建物の集まり。
そして、現実世界ではまずお目にかかれないであろう鎧やローブなどを着込み、剣や槍や斧や杖などを手に持ち闊歩している人間達。
それを見て実感する。

「ここがゲームの世界か」

第一話【はじまりのはじまり】（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。
この話はご覧の通りオンラインＲＰＧをメインにしていますが、じつは筆者はオンラインＲＰＧやった事がありません。
ほとんど想像でかくつもりです。
なので既プレイ者の方々はこの先「ん？」と首を傾げられる場面があるかもしれません。
それでも、この先の話に目を通していただければ幸いです。

第二話【現状把握】

「ここがゲームの世界か」

僕は自分の周囲を見渡し、このゲームの世界に圧倒された。
なにせ、ゲームとは思えないほどにグラフィックがリアルだからだ。
ここはゲーム内の世界だと解っているはずなのに、まるで現実世界の風景を現実世界の自分の眼で見ているような錯覚に捉われる。
今、僕の意識が乗り移っているこのアバターが普段の体を動かすのとほぼ変わらない感覚で動かせるこの状況も錯覚に一役買ってると思われる。

「さて、まずはステータス見てみるか」

ステータス確認を行う場合には、ゲーム開始時に全プレイヤーキャラに配布される腕時計を使うらしい。
腕時計には四つのボタンがついていて、それぞれのボタンを押す事で色々な機能が使える多機能な腕時計である。
と説明書に書いてあった。
左手首に装着してあった腕時計を操作してみる。

「ステータス表示は……このボタンかな？」

この腕時計は画面の中央にデジタル形式で時間が表示され、その左上に赤色のボタン、右上に青色のボタン、左下に黄色のボタン、右下に緑色のボタンが設置してある。
その四つのボタンのうち、僕は左上の赤いボタンを押してみた。
ピッという軽い音と共に半透明のウィンドウが目の前に出現した。
ウィンドウには道具、装備、ステータスといった項目が並んでいる。

当たりのようだ。
説明書によると半透明のウィンドウはタッチ式で操作できる仕様だったはず。
ウィンドウの中にある【ステータス】の文字に指先で触れる。
ウィンドウの中の文字が全て消えて、ステータスの数値の文字列が新たに浮き出た。

「どんな感じかな？」

ステータスに目を通す。
名前はリンネ。
最初は名前の意味が解らなかったが、すぐに姉さんが自分の名前を一部変換したものだと解った。
姉さんの名前は鈴音（すずね）だ。
鈴は【すず】の他に【りん】とも読めるので、鈴音を【りんね】と読んでそれを名前にしたのだろう。
性別は女性。
うん、予想通り。
姉さんが自分でプレイするために作ったキャラだから、当然アバターの性別を女性にしてある事くらい予測済みだ。
まあ、プレイする上で大きな支障にはならなそうだし、たいした問題ではない。
次はレベル。
これも予想通りの一。
ついでに言うと経験値もゼロ。
一回も戦って無い証だ。
これは僕にとっては都合がいい。
レベルの上げやすさ的な意味で。
ＨＰは三十。
ＭＰは五。

普通に低いが、レベル一だから仕方ない。
使用できる魔法や特技、無し。
レベル一だから仕方ない。
他の能力も軒並み低い。
レベル一だから以下略。
所持金、無し。
レベル一以下略。
職業は旅人。
これはゲーム開始時、最初から設定されている職業で職業を変える事ができる。

「と、まあ、こんな感じか」

一通りステータス確認が終わり、次に持ち物や装備品のチェックをした。
結果。
持ち物、無し。
装備品、旅人の服のみ。
まさにアバター作成だけして中断したって感じだ。
なにはともあれ、持ち物・装備品チェックも終わった。
ついでに腕時計の残りのボタンがどんな機能なのか調べてみるか。

「まずは青」

青のボタンを押す。
メッセージウィンドウが出現し、今は使える魔法・特技が無い、とのメッセージが出た。
どうやら魔法や特技を使いたい時には青のボタンを押さないと使えないようだ。

「なるほど、次は黄色っと」

黄のボタンを押す。
腕時計の画面が音も無く光を発した。
何か起こるのかと身構えていたが、五秒経っても、十秒経っても、何も変化は無かった。
これはライト機能ってことでいいんだろうか。
主に夜や洞窟などの暗い場所で役立ちそうだ。

「ふむふむ、最後は緑色だ」

緑色のボタンを押す。
再びメッセージウィンドウが出現し、フレンドがいません、との文章が表示された。
多分フレンドに関するボタンだろう。
フレンドというのは、文字通り他のプレイヤーと仲間になるシステムの事だ。
フレンドになる手順は簡単で、フレンドになりたい相手にフレンド申請をする。
そして、相手が申請を許可すればフレンドになる。
フレンドになれば、フレンドがログインした時にメッセージウィンドウが知らせてくれたり、戦闘中に条件を満たせば協力技を繰り出せたり、と色々便利で良い事がある。

「今んとこ使えないボタンは二つか」

腕時計のボタン確認が終わり、結論を口にする。
さて、ある程度現在の状況は把握した。
次はレベル上げに、もっと簡単に言えばモンスターと戦うために必要な行動。

それは戦力の増強。
そのための手っ取り早い方法。
一つは武器・防具を買う事。
そして、もう一つは旅人から別の職業へ転職する事。
所持金がゼロの現状では転職に頼らざるを得ない。
つまり、次の僕の行動は転職の神殿に行って転職する事。

「そうと決まれば、もたもたしてられない」

という訳で、転職の神殿に出発！

第三話【迷子の転職者】

「あれ？　ここ、どこ？」

転職の神殿に向かい歩き続けること十分、僕は道に迷っていた。
神殿は町の中にあるはずだから適当に歩いてればそのうち着くだろうと思って、スタート地点であるエーアの町の広場から出発し、デタラメに歩き回っていたらいつの間にか広場に辿り着い知らない所にいた。
人通りは多いし周りに建物がいっぱいあるから少なくとも町中ではあるんだろうけど……参ったなあ。
とんだタイムロスだよ。
こんなことなら、誰かに道を聞いておくんだった。

「とりあえず、誰かに道聞こう」

道行く人を見渡し、優しそうなアバターのプレイヤーに声をかける。
女性のアバターだ。

「ちょっと聞きたい事があるんだけど」
「なんでしょうか？」

よし、止まって話を聞く態勢に入ってくれた。

「あの、転職の神殿ってどこにあるかわかるかな？」
「それなら、今から私が行くところですけど……良かったら一緒に来ます？」

僕がその申し出を受けた事は言うまでもないだろう。

そんな訳で、二人で転職の神殿を目指し歩く。

「ところであなたはどんな職に就くつもりですか？」

「戦士かな」

質問に迷い無く答える。

これは始める前から決めていたことだ。

魔法使い系の職業はＨＰはもちろん、ＭＰの数値も重要になってくる。

ある程度レベルが上がればＭＰに余裕が出てくるが、序盤は魔法を数発撃てばそれで終わる程度のＭＰしか持たない。

そしてＭＰの切れたソレはあまりに力不足だ。

前衛職とパーティーを組めば問題点が解消されるが、僕とパーティーを組んでくれる人がいるかどうかはわからない。

一人で戦う事を想定すれば、ＭＰの心配が無くて物理攻撃力とＨＰの高い戦士が一番良い選択だと考えた。

「戦士……ですか」

「そっちは何の職になるつもり？」

僕が戦士と言った時の反応が気にかかったが、考えたところで解りそうもなかったので無視して会話を続ける。

「私は魔法使いか僧侶になるつもり、かな」

魔法使いか僧侶……攻撃型と回復型の違いはあれど、基本的にどっちも後衛型の職業。

前衛型と一緒じゃないとなかなかに大変そうだ。

ということはこの人には仲間がいるんだろうか。

いいなあ、仲間。

僕の周りでゲームやる人って姉さんくらいしかいないから、こうい

うゲーム系での援軍は期待できない。

「あ、見えてきましたよ、あそこです」

彼女の指差す方には、大きな建物がそびえたっていた。

「これが転職の神殿……立派だ」

「そうですね……って眺めていても始まりません。早く中に入りましょう」

現実では見たことの無い大きさの建物にやや威圧されたが、気を取り直して神殿内部に入る。

「中も広いですね」

「うん、凄いや」

月並みな感想しか出てこなかったが、神殿の中は本当に凄い広い。

その広さは東京ドーム一つ分は余裕で入りそうな程だ。

これだけ規模の大きな建物、現実ではめったにお目にかかれないだろう。

だが、今は見とれている時間も惜しい。

「早く転職しよう」

「あ、そうですね」

「ところで、どこで転職やってんの？」

「えっと、たしかここの通路をまっすぐ行った所に『転職の間』っていう転職できる部屋があるはずです」

なんか、この人やけに詳しいな。

ま、手間が省けたからいいや。

「それじゃ行こうか」
「はい」
教えてもらったとおりに通路を進むが、そんな僕達の視界に部屋から溢れ出ながらも列を成しているアバターの集団が映った。
「うわっ、なんだこれ！？」
予想外の光景に、驚きを隠せなかった。
「これ、もしかして全員が転職する人なんですか？」
列の先には『転職の間』と書かれているプレートがかかっていた。つまり列の先が『転職の間』である事から、その可能性は限りなく高いだろう。
とりあえず、列の最後尾に並ぶ。
列の先頭までざっと三百メートルはありそうだ。
「これじゃどのくらい時間がかかるか判ったもんじゃない」
「早くても一時間は待たされそうですね」
「オンラインＲＰＧの初日ってどこもこんな感じなんだろうか」
「いえ、さすがにこれほどのは滅多に無いです。おそらく、ゲームの世界に入り込める『ダイバー』の初ソフトの発売初日である事と今日が祝日である事が合わさったせいかと思われます」
「そうなんだ……ん？　なんか後ろが騒がしいな」
やけに背後が騒がしいので振り返ってみると、すでに僕達の後ろにプレイヤーのアバターが五、六体程並んでいた。
列の最後尾に並んでから、まだ二分程度しか経っていないのにコレ

だ。

「まだ午前中ですからこれでもまだ良い方ですよ。夜になると部活終わりの学生や仕事帰りのサラリーマンの人達も来ますから、今夜は下手したら建物の外まで列が伸びるかも……」

「た、建物の外、だって？」

そんなに長い列だと、最後尾の人達は冗談抜きで朝まで待つ事になりかねない。

僕はゲームに関してそこまでの情熱を持っていないので、少し引いてしまう。

「はい、とはいっても今のはちょっと表現を大袈裟にしちゃいましたけど」

「だ、だよね……いくらなんでも建物の外なんて」

「そうですね。入り口付近までなら有り得る話ですけど」

入り口って……入り口までも結構距離あるんだが。

しかも、驚く事ではないとばかりにさらりと言ってのけた。

この人との価値観のずれを感じずにはいられなかった。

「うーん、まだまだ時間がかかりそうですね」

今度は大袈裟に表現したと言わない女アバターに若干の不安を感じながら、この退屈な待ち時間をどうやって潰すか考えを巡らせる。

第四話【勧誘】

結局、僕達が転職できたのは列に並んでから二時間半も後の事だった。

「なんか疲れた……」

転職の神殿から出た僕はげんなりとした声で呟いた。

「そ、そうですね。でも、ちゃんと転職出来たし、それにアイテムまでもらえたじゃないですか。リンネさん」

僕のテンションが下がっているのを察知して、神殿まで案内してくれた女アバターのユキさんがフォローを入れた。

「まあ、それは予想外で嬉しかったけどさ」

神殿で僕は戦士、ユキさんは僧侶に転職後、神官から武器、盾、消費アイテムを貰った。

なんでも、初回転職サービスらしい。

ちなみに貰ったアイテムは木刀、木の盾、薬草を一つずつ。

薬草はともかく、無料で装備品をある程度整えられたのはラッキーだった。

ちなみにユキさんが貰ったアイテムは木刀が木の杖に変わっただけで後は僕と同じ。

どうやら、配られる武器は職業に関して変わるらしい。

「さてと、転職できたし早速モンスター倒してこようかな」

僕にとってはここからが本番だ。
敵と戦えるようになるまでに三時間もかかるとは思わなかったが、ようやくレベル上げが出来る。

「あの、リンネさん。ちょっと質問いいですか？」

ユキさんが僕になにか聞きたいことがあるらしい。
その表情は真剣なものだった。

「なに？」
「リンネさんは今からモンスター倒しに行くんですよね？」
「そうだよ」
「一人でですか？」
「まあね。始めたばっかだから、まだ仲間いないし」
「じゃあ、私達のパーティーの一員になって一緒に戦いませんか？」

それは予想だにしなかった誘いだった。
だって、神殿への道を教えてもらい一緒に転職したとはいえ、ただそれだけしか係わってない。
それに、特に好かれたり興味を持たれるような言動をした覚えは無い。
職業や装備なども特別なものではない。
端的に言えば、理由が無い。

「なんで僕をパーティーのメンバーに？」

僕が聞くと、ユキさんは

「リンネさん一人では大変だと思いまして。リンネさんは前衛職ですから、敵の攻撃をモロに受ける頻度が圧倒的に多いでしょうから

HPの減りが激しくなります。回復役のいるパーティーに入っておいて損は無いと思いますよ」

と答え、それからニコッと笑うと一言付け加えた。

「それに私達のパーティーにもう一人、前衛職の方が欲しかったんです」

なるほど、両者が得をする状況となるから僕を勧誘したのか。
僕としては願ってもない展開だし是非ともその申し受けを受けたい。
しかし、今の状況では返答できない。
なぜなら、僕の操作しているこのアバターは姉さんの借り物だからだ。
三日後、姉さんが合宿から帰ってきたらプレイヤーは僕から姉さんにチェンジする。
その事をユキさんとそのパーティーメンバー達に伝えなきゃならないし、姉さんにも許可を取らなくちゃダメだ。

「ユキさん、パーティーの人達に話したい事があるから会わせてくれるかな？」
「はい、いいですよ。それじゃ、広場にメンバーを集めますから広場に向かいましょう」

ユキさんは僕の頼みを快諾し、歩き始めると同時に腕時計を操作し始めた。
おそらく緑色のボタン、フレンド関係の機能を使っているのだろう。
ちなみに腕時計の操作時に出現する半透明のウィンドウは、腕時計の装着者以外には不可視の設定がなされている。
なので、僕からはユキさんがどのウィンドウを開いているのか、そもそもウィンドウを開いているのかさえ判らない。

でもまあ、目の前の何もない（ように見える）空間に両手を走らせているからウィンドウは開いているんだろう。
そんな事を考えている間に広場に着いた。
と同時に、ユキさんも空中でせわしなく動かしていた手を止めた。

「後、五分くらいで来るみたいです」

五分か……心の準備をするのには十分な時間だ。

第五話【ログアウト】

「あ、来ましたよ、リンネさん」

パーティーメンバーを待つ事、五分。
ユキさんのパーティーメンバーが到着したらしい。
ユキさんが手を上げると、パーティーメンバーが反応し手を上げ返す。
手を上げた者は二人だった。
多分、どっちとも男だ。
男だと思った理由は無いが、強いて言うなら勘だ。
近づくにつれ、僕の予想が当たっている事に確信を持つ。
二人の男は軽装な皮の鎧に身を包んでいる。
ゲームスタート時の所持金はゼロのはずだから、神殿で支給された装備品やアイテムを売ったか、もしくはモンスターを倒して手に入れた金で買ったか。
多分、後者だろう。
僕がそんな他愛も無い事を考えている間に、二人はもう目前にまで辿り着いていた。
一人は僕と同じ戦士だろうか。
武器である剣を背中に留めていることから前衛職であることは間違いないだろう。
もう一人は弓使いだろう。
背中から弓と矢がはみ出ているのが見える。
さらにこの弓使いにはアバターに大きな特徴がある。
そのアバターは威圧感漂うごつい体格、岩を削って作り出したようないかつい顔、眼光は鋭く右目から頬にかけて刀で切られた痕のような大きな古傷が刻まれている。
と、非常に独特な外見のアバターだった。

臆病な人が見たら、怯えそうなくらい独特だ。
隣にいる男やユキさんがいたって普通の外見のアバターなだけに、弓使いのアバターがより一層異様に見える。

「リンネさん、紹介しますね。パーティーメンバーの戦士・コウと弓使い・フェルナンデスさんです」

ユキさんが二人の横に移動し、メンバーを紹介してくれた。
ええと、戦士の方がコウで、怖い弓使いの方がフェルナンデスか。

「俺はコウ。よろしくな、リンネ！」
「ああ、よろしく」

コウさんは裏の無い満面の笑みを僕に向けた。

「はじめまして、リンネさん。フェルナンデスです」

渋めの低音ボイスが耳に届く。
フェルナンデスさんの方を向くと、優しげな笑顔と共に手を差し出していた。
それが握手を求めている行動だと気づき、差し出されている手を握る。

「よろしくお願いします、リンネさん」
「あ、はい。よろしく……」

見た目とは全然違う物腰の柔らかさに軽い驚きを覚える。

「フィルナンデスさんは見た目からして勘違いされやすいんですけど、普通に良い人なんですよ」

ユキさんは苦笑しながらフェルナンデスさんに視線を移すが、何かを思い出したかのように僕の方に向き直った。

「そう言えば皆に話したい事があるといってましたけど、いったいなんですか？」

そうだ、話さなきゃならない事があったんだ。
フェルナンデスさんのインパクトが強すぎて、頭の中からその事が吹っ飛んでいた。

「ええと、僕は三人の仲間になる事に異存は無いんだけど、今の僕は状況が特殊だから僕の一存では決めれないんだ」

そう前置きして、僕は話した。
僕の今の状況を。
姉に頼まれ代わりにプレイしている事、故にこのアバターが借り物である事、そんな理由があるから僕の意思で仲間になるかどうか決められない事。
さすがにアルバイト代などのことは話せないが、できうる限りの事を話した。

「……って事だけど、それでもいいかな？」

言い終わり、三人に判断を委ねる。

「俺は別に構わんぞ！」

真っ先に声をあげたのはコウだった。
しかし、即答したという事はまともに考えずに答えたという可能性

が高い。
僕が言うのもなんだけど、もう少し考えて発言しようよ。
「ユキとフェルナンデスはどうだ？」
コウが二人に返答を促す。
「コウ、アンタはもう少し考えるってことを……でも、私もリンネさんを仲間にしたいな」
ユキさんも賛成してくれた。
残りはフェルナンデスさんだけだ。
全員の視線がフェルナンデスさんに集中する。
「二人の意見が同じなら、自分は口出ししませんよ」
フェルナンデスさんは自分の意見を主張せず、二人の意見に追従する形となった。
それでも反対者はゼロということで、ユキさん達の側の許可は取れた。
今度は姉さんの許可を取らないと。
全く、これだから他人のキャラを使ってプレイするのは面倒なんだ。
「じゃあ、僕これから一旦ログアウトして姉さんから許可もらってくるから。えーと……午後一時半にまたこの広場に来てくれるかな」
三人に一度ログアウトする旨を伝え、再集合時間を約二時間後に設定した。
幸いな事に全員、その時間の都合がつくらしく午後一時半に集合で決定となった。

僕は広場から離れると、そのすぐとなりにある宿屋へ入った。
ここには、これまでのプレイデータを記録しログアウトするための設備がある。
それは出入り口に設置されている『記憶球』と言う名の球体だ。
この『記憶球』はここだけではなく全ての宿屋の出入り口に設置されていて、どこからでもセーブ&ログアウトができる。
今も僕の目の前で『記憶球』は淡い光を発しながら、床から一メートルくらいのところでプカプカと浮かんでいる。
手を伸ばし『記憶球』に触れる。
すると、メッセージウィンドウが出現し、データをセーブしている事を知らせる文が流れる。
五秒くらいでメッセージウィンドウは一度消え、別のメッセージウィンドウが現れる。
そこに記された文はログアウトするか、まだゲームを続けるかの選択肢。
僕は迷い無くログアウトを選ぶ。
途端に視界が光で埋め尽くされ、眩しさに耐え切れず目を閉じる。
さっきのゲーム開始時と同じ状況だ。
光が消え、目を開けると見慣れた天井が見える。
僕の部屋の天井だ。

「戻ったか……」

ゲームの世界から現実世界へと戻った僕は、ベッドから降りて被っていた『ダイバー』を外し、ついでにコンセントからプラグを抜いておく。

「さてと」

机の上に置いてあった携帯電話を手に取り、姉さんの携帯番号に電

話をかける。

「さて、出てくれるかな？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9096x/

はじめてのオンラインＲＰＧ

2011年11月8日03時10分発行